『朱漆湯庫』修理報告

安里成哉[1]　土井菜々子[2]

Ⅰ.はじめに

本資料は、一般財団法人沖縄美ら島財団所蔵の『朱漆湯庫』である。

令和3年4月5日より令和4年3月31日まで沖縄県立博物館・美術館修理修復室内の琉球漆工藝舎にて修復が行われた。修復にあたっては、安里成哉を担当職員とし、土井菜々子を修復責任者兼担当者とした。

Ⅱ.修理報告

1.名称

朱漆湯庫

2.員数・法量(㎜)

寸法:271.0×高303.0

3.資料概要

木製、口部が広がった八角形の湯庫。左右の立上りに取手を挿し込むことで蓋が固定される造りとなっている。表は朱漆塗り、内側と底裏は黒漆塗り。湯瓶の注ぎ口を表に出すために作られた切り込みの周辺には、飾り金具が太鼓鋲で留められ、同様に左右の立上り先端にも付く。中に錫製の湯瓶を納める。

---

[1] 一般財団法人 沖縄美ら島財団 総合研究センター 琉球文化財研究室 琉球文化財研究係 係長

[2] 琉球漆工藝舎 代表

4. 損傷状態

塗膜の所々に、内から茶色い液体のようなものが染み出たような跡が見られる。また、薄葉紙が貼り付いた跡が色ムラとして塗膜に確認できる。

蓋は若干の反りが起こり、縁には、欠けや塗膜の浮きが多く見られる。部分的に木地が露出している。取手は可動式の摘みの隙間に埃が溜まり、虫の抜け殻も見られる。また、角や組み立てた際に身や蓋と接触し負荷がかかる箇所に塗膜剥離や欠けが多く見られる。特に、木口にあたる取手の両端の面は塗膜の剥離、剥落が著しい。

身は、左右の立ち上がりと側板、側板と底板、側板の角接合部に亀裂が入り、その周辺塗膜の剥離、剥落が多く見られる。特に蟻組み箇所は、段差ができるほどである。その他、底裏の角には、木地が露出する欠けが多く見られる。剥落した塗膜片は別途保管されている。

飾り金具や支柱に打たれた太鼓鋲の頭部の欠失が 4 箇所に確認できる。錫製の湯瓶は、蓋、胴側面、注ぎ口など、数力所に白い錆が出ている。

5. 修理方針

現在、我が国で行われている指定文化財漆工芸品の保存修理に則り、現状保存修理を原則として行う事とする。修理に際しては、充分に事前調査を行い、傷み等の現状を確認した上で修理工程を決定する。また、写真撮影を伴った修理の記録を取り、修理後と比較できるようにし、修理終了後、報告書を作成し提出する。

6. 修理作業

はじめに、修理後と比較出来るよう、修理前撮影および状態調査を行った。

撮影、調査後、塗膜汚れを取り除くためのクリーニングを行った（図 1)。作業は、塗膜に傷が入らないよう、払い毛棒で大きなゴミを取り除いたのち、水を含ませた柔らかな木綿布で拭き上げた。カビや油分を含んだ汚れはエタノールを使用し、除去作業を行った。茶色い液体のようなものが染み出たような跡は完全には除去できないため、可能な範囲で水拭きによる拭上げを行った。塗膜の状態が不安定な箇所は、可能な範囲での汚れ除去に留め、塗膜安定後に再度クリーニングを行う事とした。

図 1　クリーニング

劣化した塗膜の艶と弾力を取り戻すための漆固めを行った。溶剤で希釈した漆を塗膜面に塗布し、漆を吸い込ませたのち、余分な漆を完全に拭き上げた。同時に木地および下地が露出した部分には、漆を染み込ませて補強した。

木地構造の亀裂部には、接着用に調合した麦漆を流し込み補強した（図 2)。同時に、木地亀裂部周辺に見られる剥離塗膜の接着を行った。作業は、亀裂に木地接着用に調合した麦漆を流し込み、木枠と竹ヒゴを用いて固定した（図 3)。その他の塗膜剥離箇所についても同様に麦漆を流し込み、クランプやハタガネを用いて塗膜押えを行なった（図 4-1, 図 4-2)。同様に、持ち手部分と蓋に見られる塗膜剥離の塗膜押えを行った。

図 2　麦漆含浸

図 3　木枠を使用した押え

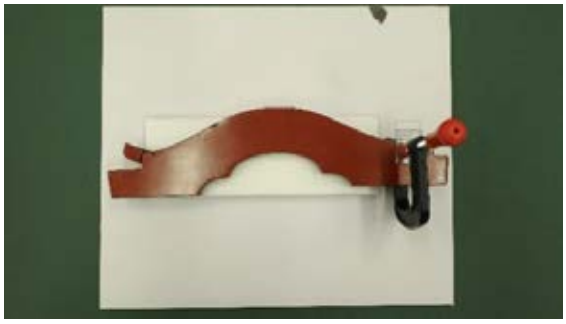


図 4-1　クランプを使用した塗膜押え

図 4-2　クランプとハタガネを使用した押え

左右に付く立上りに打ち込まれた竹釘のうちの 1 本が、虫害により、ほぼ粉状になっていた（図 5）ため除去した。除去した虫害により損傷した竹釘は、新たに作成した（図 6）。竹釘を打ち込んだ後、釘穴周辺の塗膜および下地欠損部分に刻苧を施した。

図 5　竹釘の虫害

図 6　新規作成した竹釘

木地の収縮により、左右に付く立上りの材と合口との間にできた隙間に木材を挟み込み、さらに刻苧充填により補強をはかった（図 7-1, 7-2）。

左右に付く立上りと側面の板との接合部や底板と側板との接合部、蟻組で接合された部分のなどに生じた隙間には、刻苧を充填した。

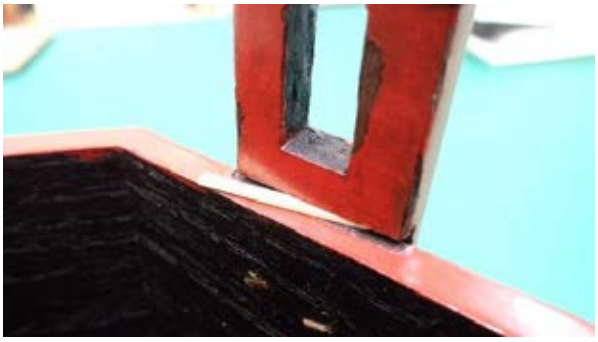


図 7-1　木材嵌め込み

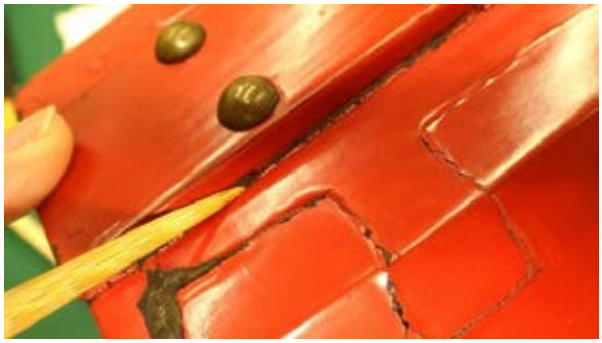


図 7-2　刻苧充填

刻苧充填部分や亀裂部分には、下地を施した（図 8）。下地が十分に固まった後、砥石や刃物を用いて表面を整え、漆固めを行い仕上げとした。

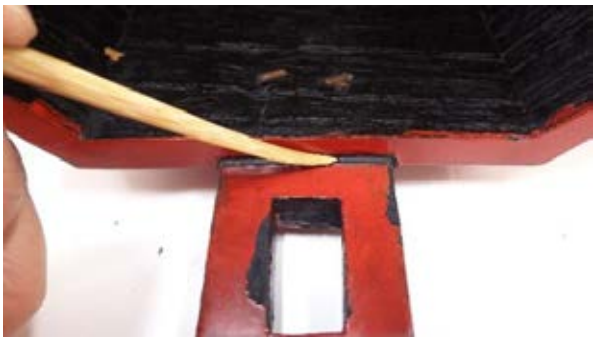


図 8　下地付け

蓋表中央に見られる塗膜の色が変化した部分は、摺漆を施すことにより色調整を行った。朱漆塗りの湯庫は、色の変化を避けるため、調合した透き漆を溶剤で希釈して使用した。塗膜の艶や色味などの様子を見ながら極薄く摺漆を複数回施した。身の塗膜にも摺漆を施し、蓋表の色艶に合わせた（図 9）。

図 9　摺漆

最後に、修理前と比較出来るよう、修理後の撮影を行った。

7. 修理工程

(1) 修理前写真撮影・調査
(2) クリーニング
(3) 漆固め
(4) 木地亀裂部麦漆含浸

(5)塗膜接着
(6)刻苧充填
(7)下地付け
(8)下地の漆固め
(9)摺漆
(10)修理後写真撮影・報告書作成

8. 修理場所

沖縄県立博物館・美術館内修理修復室

9. 修理期間

令和 3 年 4 月 5 日～令和 4 年 3 月 31 日

10. 所見

・側面は蟻組を用いて制作されている。
・左右の立上りは身の本体に竹釘と金属杭で固定されている。
・下地は薄付けである。
・蓋裏に漢数字の「三」が、身の底裏には、「六」の漢数字が刻まれる。

修理前修理後写真

全景　修理前

全景　修理後

底裏　修理前

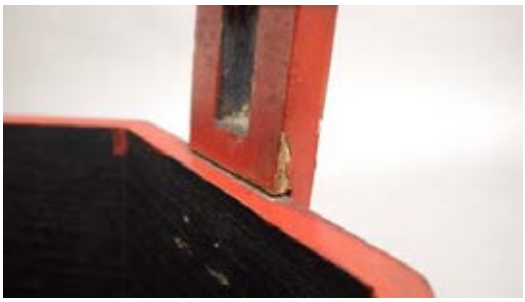
底裏　修理後

蓋表　修理前

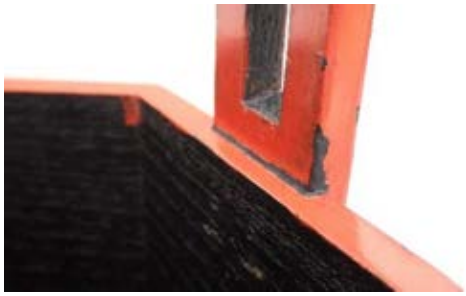
蓋表　修理後

取手　修理前

取手　修理後



立上り接合部　修理前



立上り接合部　修理後

立上り竹釘部分　修理前

立上り竹釘部分　修理後

身底部（左）　修理前

身底部（左）　修理後

身底部（右）　修理前

身底部（右）　修理後